ポスター発表 Room 1

前半 16:00～17:00 司会進行 沢井 佳子

1. 日本の園での食事場面における保育実践 食べ終わるまで「待つ」という行為に着目して
瀬尾知子
2. 逆境にある子どもを描いた絵本の分析—困難な状況で子どもは何を必要とするのか—
伊豆田麻子
3. 子どもと保護者のための野外音楽活動プログラムの実践報告
花岡清美
4. 子ども主体の保育実践実現迄のプロセス—経験年数5年に至るまでの保育者の体験から—
桐川敦子
5. 地域財産としての児童文化財の現状と記録～岩手県岩泉地区に残る子どもの伝承遊び調査
丸山ちはや
6. 子どもの空手学習におけるリズム活動を用いた身体動作の特徴と支援
深町澄子
7. 戦時体制下における『愛国少年』の読者に関する一考察
田中卓也

後半 17:00～18:00 司会進行 高塩 純一

8. 本人の参加を促す意思決定支援をしたことで最適な電動車椅子使用が可能になった症例
田中あゆみ
9. 肢体不自由児の美術制作における画材、素材、使用方法の工夫の共有
南雲まき
10. 多胎児をもつ特定妊婦の特徴および助産師の支援と課題
渡邊梨央
11. ロールプレイを活用したドゥーラ（出産付き添い者）トレーニングの開発
福澤利江子
12. コロナ禍の中で「できること」を考える —地域子育て支援センターBから—
鈴木祥子
13. 小学生から高校生までの学業の成績評定に及ぼす社会経済的地位と教育環境・学習環境との関連に関する行動遺伝学的検討
安藤寿康
14. 平成の大合併における市町村の保育の変遷 - 過疎関係市町村の合併協議会に着目して -
西垣美穂子

ポスター発表

1. 日本の園での食事場面における保育実践 — 食べ終わるまで「待つ」という行為に着目して —

瀬尾知子（秋田大学教育文化学部）

【目的】 幼児期は、基本的食習慣を形成する重要な時期であり、何をどのように食べるかは、は他者と食べることを通して、その文化の中で身に付ける営みである。

本研究では、日本の子どもが園での食を通してどのように、日本の文化に適した食行動を身に付けているのかを検討することを目的とする。

【方法】 Video-cue multivocal method(Tobin, Wu,& Davidson,1989) の研究方法を援用し、日本の園での食事場面をまとめた20分のビデオを作成して、そのビデオをインタビューのきっかけとして用いた。20分に編集されたビデオをもとに、アメリカの3歳児クラスを担当している保育者3名、園長の計4名にインタビューを実施した。そしてインタビュー調査をもとに、日本の園での食事場面における保育実践の特徴について、質的分析と解釈を行った。

【結果】 日本の食事場面のビデオを視聴した後に、日本の園の食事場面で印象に残ったところに関して語る場面で、アメリカの保育者は、食事を食べ終わっても、食べ終わるまで、子どもたちが「待つ」ことについて言及していた。

日本では、きちんとした状況と打ち解けた状況、異なる時間というように、刻々と使い分けが求められる(林・トービン, 2019)。日本の多くの園における食事場面では、挨拶により食事の時間が区切られ、その時間はお互いに相手に自分を合わせることをしながら、他者と食事時間を共有することが求められる。つまり、子どもたちはクラスの一員として、食事の時間と空間を共有することを求められる。日本文化において、園での食事場面は「待つ」という行為を通して、子どもたちが忍耐力や他者と同調することを学ぶ機会となっていることが示唆された。

※本研究は、秋田大学研究倫理委員会の了承を得た。

ポスター発表

2. 逆境にある子どもを描いた絵本の分析 — 困難な状況で子どもは何を必要とするのか —

伊豆田麻子（練馬区光が丘第六保育園・星槎大学大学院客員研究員）

絵本には、作家・画家・伝承者らの、そして彼らが生きた時代や社会の、願いや希望、語り伝えたいこと、子どもの姿が映し出されており、その中には、子どもの困難を描いたものも多くある。時代は異なっても、現代の子どもも災害、紛争、貧困、虐待、いじめ、感染症流行による活動の制限など、社会の様々な影響の中で生きている。

本研究の目的は、逆境にある子どもが必要としたものは、絵本の中ではどのようなものであったかを明らかにし、そこから現在にも通じるメッセージを読み取ることである。研究の方法として、レジリエンス（心の回復）の促進要因とされる「メンター」の役割を参考に、困難な状況にある子どもが会う、人形、動物、自然、人など、子どもにとっての「重要な他者」の特徴によって絵本を分類し、考察を行った。絵本の中で子どもが会うそれらの存在には、逆境にあつて子どもが必要とするものが象徴的にあらわされているのではないかと考えたからである。

「重要な他者の性質」「子どもがその他者を必要とする度合い」の2軸によって分類を行った結果、子どもの逆境を描いた絵本は、4つの領域に分類された。「他者の性質」は、物語の時代背景や地域性、社会的なサポートの多寡などによってちがいがあり、「他者を必要とする度合い」は、逆境の重なりや、子どもが「自分を支えることばや愛された記憶」をどのくらい蓄えているか、などによるちがいがあらわれた。逆境を生きる子どもたちは、生い立ちや生まれ育った文化の中で蓄えた誇りや信念などを拠り所としている場合もあれば、子ども自ら、必要とする存在と出会う、或いは創り出すこともあることが示された。

ポスター発表

3. 子どもと保護者のための 野外音楽活動プログラムの実践報告

花岡清美（常葉大学短期大学部保育科 非常勤講師）
遠藤知里（常葉大学短期大学部保育科 准教授）

【目的】本研究では野外での乳幼児を含む子ども、保護者、学生を対象とした音楽活動実践について検討し、その可能性を探った。

【方法・倫理的配慮】2021年5月XX日（10:30～14:30）子ども（0～6歳、11名）、保護者（7名）、キャンプカウンセラー経験のある短期大学2年の学生（9名）と共に野外音楽プログラム（①親子音楽遊び、②楽器作り等コーナー③保護者対象音楽リラクゼーション）にて録画、行動観察、質問紙調査を実施し、内容・プロセスに検討を加えた。倫理的配慮に関しては、被験者へのインフォームド・コンセントにより事前に参加同意を得た。

【結果と考察】構成的な集団活動から自由な個別活動への移行プロセス（ふれあい遊び～学生の介入～打楽器の探索・即興）を経て各々の緊張がほぐれ関係構築ややりとりが流動的且つ円滑に進む様子が見られ、後半は複数の小集団で即興が同時進行していった。十分な探索体験により、楽器作りの具体的イメージが持ちやすかった様子が見られた。リラクゼーションでは保護者が心身の状態や音の心地よさを感じていたことが確認された。質問紙回答からは、楽しめたものとして親子音楽遊びやリラクゼーションと並んで自然環境が挙げられた。子どもの自発性、主体的な探求と表出・表現、社会的行動が認められ、学生が子どもの発見を同等の立場で受け止め、共感性をもって柔軟に関わる様子が観察された。本研究は静岡県立朝霧野外活動センターの協力を得て実施された。

ポスター発表

4. 子ども主体の保育実践実現迄のプロセス —経験年数5年に至るまでの保育者の体験から—

桐川敦子（日本女子体育大学）

保育の現場において、子ども主体の保育実践を行うことは、1989年、1990年にそれぞれ改定された「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」から2018年に改訂された現行のものに至るまで、とりわけ重んじられている。しかしながら保育実践の場における主体性の捉え方は一様とは言い難く、現状において、保育者には子どもが主体性を発揮するための援助方法について考慮する際、困難が生じることがあると言われており、経験年数の浅い保育者にとっては特に課題となっていることが予測される。

本研究は、保育経験5年の保育者が、子どもの主体性を重視して保育を行う専門的な実践力の特性を獲得するまでに、どのようなプロセスを踏んでいたのかについて明らかにすることである。2019年から2021年に、5年目を終了し、研究協力に同意した保育者8名に対し、半構造的インタビュー調査を行い、取得したデータを、B. G. GlaserとA. L. StraussのGrounded Theory Approach (GTA)を用いて分析を行った。

キーパーソンのデータを中心として分析を行った結果、保育者は5年の実践の中で、まず『子どもの活動動機の尊重』を行い、その後さらに『内発的活動空間の構成』を行うに至っていた。本研究は日本女子体育大学倫理審査委員会の承認を得た（承認番号2018-4）。

ポスター発表

5. 地域財産としての児童文化財の現状と記録 ～岩手県岩泉地区に残る子どもの伝承遊び調査～

丸山ちはや（盛岡大学短期大学部助教）

長崎 由紀（岩手県立児童館いわて子どもの森主任児童厚生員）

古くから遊び継がれてきた「伝承遊び」は、多様な動きの中で身体能力が発達し、活発な相互交流によって知性や社会性を自然に獲得できる活動である。しかし、現在は少子化が進み、地域で異年齢の子どもたちが群れて遊ぶ機会は減少している。また電子ゲーム機器による一人遊びが急増し、方言や地域性のある伝承遊びは急速に失われつつある。そこで本研究では、現在岩手県に継承されている地域財産としての伝承遊びに注目し、採取・記録を行い、保育者や子ども支援者などへ受け継がれる実践教材としていく。

【方法】 本学在籍の学生が祖父母や親世代を対象に伝承遊び採取調査を行い、現状を把握した。また、岩手県岩泉地区で1935～1955年頃子ども時代を過ごした高齢者を対象に聞き取り調査を行った。

【結果】 学生の採取調査では、集団で遊ぶ「はないちもんめ」「缶けり」（ポコペン）、少人数で遊ぶ「お手玉」「かごめかごめ」「ゴム跳び」「毬つき」「めんこ」等が多く採取できた。また高齢者からは「べった（めんこ）」「だんま（お手玉歌付）」「おはじき」「缶・石けり」等の他、木の実や川魚をとるような「名前のない遊び」が採取できた。

【考察】 学生が知らない遊びも多く、伝承遊びは子どもの暮らし、家族の生業、地域の年中行事などの影響も大きかった。生活様式や経済構造も変化している現在では、保育者や子どもの支援者は、伝承遊びを継承しつつ、子ども自身が自ら遊び、遊びの文化を形成・継承していくことを援助する意識が必要である。本研究は学校法人盛岡大学研究助成（2020.2021）「岩手県に残る子どもの伝承遊び～学生による聞き取り調査及び岩泉地区フィールド調査（その1）」の研究成果の一部である。

ポスター発表

6. 子どもの空手学習におけるリズム活動を用いた身体動作の特徴と支援

深町澄子（お茶の水女子大学大学院保育児童学）
榊原洋一（お茶の水女子大学大学院名誉教授）

2021年4月に新型コロナウイルスの影響により、ロックダウンしたインドから日本へ避難帰国をし、日本に滞在中は東京都内の空手教室で「リズム活動を用いた身体動作」について調査を行った。昨年度の子ども学会では、身体動作の即時反応性は、リズム支援を用いた時の方が優位であったことを報告した。本年は、それを指導者がどのように支援の手立てとして活用しているかという点について追跡調査を行った。

本研究では、「音楽」を用いた空手の稽古を行っている道場に依頼し、練習風景の見学及び子どもたちの観察と実験を行った。主催者及び指導者の許可を得て、これらの練習風景を録画、観察すると、子どもたちの動きは、「音楽」や「リズムを刻む音」がある方が、ない時よりも機敏であることが明らかとなり、指導者からは、音楽を用いた稽古の方が正しい姿勢を保ちながら機敏な動きが可能であることが示唆された（2021年2月）

指導者が擬音語を用いて子どもたちの身体動作の支援を行うと、子どもの集中力が持続することや短時間で動作の習得が可能であることが明らかとなり、空手の指導において、リズムによる支援や擬音語の活用が有効であることが明らかとなった。

研究に先立ち、道場の主催者である指導者に書面と口頭による説明を行い、書面による同意を得た。保護者に対しては、指導者による説明が教室内のソーシャルネットワークの中で行われている。また、ソーシャルディスタンスを保ち、マスク着用での稽古や、事前事後の道場や子どもの手足の消毒などが念入りに行われ、子どもたちが安全に稽古を行うことができるよう配慮されていたことも併せて報告する。

ポスター発表

7. 戦時体制下における『愛国少年』の読者に関する一考察

田中卓也(静岡産業大学)

本発表では、第二次世界大戦の戦間期に発刊された『愛国少年』を資料として取り扱い、当時の少年読者の特徴を明らかにする。同誌は東京の「愛国少年社」で発刊され、雑誌代金は1冊12銭(送料込)、誌面のページ数は平均30頁程度のものであった。読者層は、およそ14、15歳の少年等から構成されていた。同誌創刊号には「諸君! 諸君に一番有益にして面白い良友!」であり、「知らず知らず常識の一般を悟り得る最も有益な面白い雑誌」となるべく「諸君の投書を歓迎し、諸君の筆戦場とするもの」と企図されていた。読者らは「通信クラブ」なる投書欄にこぞって投稿し「親愛なる愛少愛読者誌友諸君」、「僕も之から愛国少年によつて文芸の道を進んでいきたい」。「これから愛少をつづけて愛読し愛少がもつともつとはつてんするように心がけます」にみられるように「愛少」という共通言葉を使用し、想像上の読者共同体を形成していた。戦時体制の激化に伴い、同誌も戦時色を次第に帯び、「通信クラブ」の投書中には、「愛少」の言葉から、「僕等少国民」に変化した。「僕の誕生日にお友達を招待して、英語で語り合う会を開きました。ある友人は、二人一体の伝令といふ戦争美談を英語で話しました(山形県 渡部文夫)」という目を引く投稿も見られた。少年読者は複雑な思いで同誌を講読したのであろう。戦時の激化に伴い、同誌は1943(昭和18)年に第6巻第4号で廃刊となり、講談社刊行の『少年倶楽部』に合併された。同誌の誌面では「将来の日本を背負つて立ち、大東亜共栄圏の立派な指導者とならなければならない」と読者を鼓舞しながら、『少年倶楽部』に引き継がれた。

ポスター発表

8. 本人の参加を促す意思決定支援をしたことで最適な電動車椅子使用が可能になった症例

田中あゆみ（社会福祉法人不動園天ヶ瀬きぼうの家 理学療法士）
守本 明（天ヶ瀬きぼうの家 施設長）
頼富恵一（天ヶ瀬きぼうの家 サービス管理責任者）
島田貴幸（株式会社 PAS）

【背景】重症心身障がい者の最適な座位移動は、姿勢制御学習の機会にもなり移動以上の相乗効果が期待できる。今回、多職種で利用者の意思決定を支援し車椅子の種類や構造を選択した結果、交付が認められ課題解決以上の効果が得られたので報告する。

【方法】症例は40代男性、脳性麻痺アテトーゼ型四肢麻痺（大島分類1、横地分類C1）、コミュニケーション機能分類システム レベルⅢであった。電動リクライニング式車椅子の右足操作で移動は可能だが、生活全般に介助を要した。姿勢の崩れと身体の痛み、むせが強く食事がとりにくいこと、また、狭空間での移乗時、重い車いすの位置調整の介助者負担が個別支援計画に課題としてあげられた。非音声系コミュニケーションボードを用いて車椅子使用の希望と意見を選択的に聞きとりながら、理学療法士が座位姿勢の評価を伝えると自身で電動リクライニング式車椅子6輪車を選択された。その後多職種で適切な座位の構えを検討し再作製に至った。

【結果・考察】高額・多機能の特例補装具として、一度は更生相談所に交付却下の判定を受けたが、本人の意思と機能を再確認し説明したことで必要性が認められ交付された。快適な座位姿勢から、右足部の基本操作が安定し姿勢制御が可能になった。積極的に車椅子を使用し姿勢のバリエーションが増え食事を楽しめている。加えて電動車椅子が軽量化され介助負担が減り、個別支援計画の課題が解決された。脳性麻痺児/青年に対する家族・あるいは支援者中心サービスを取り入れて機能の改善に焦点を当てたりハビリテーション介入は、参加を促すことにおいてより有効な可能性があると考えられる。姿勢評価に加え、意思決定支援が大きな成果を上げた。

*本発表は、当法人倫理審査委員会の承認を受けて行った。ご本人には書面と口頭で発表の趣旨を説明し同意を得た。

ポスター発表

9. 肢体不自由児の美術制作における 画材、素材、使用方法の工夫の共有

南雲まき（立教大学文学部、長岡造形大学博士（後期）課程）

本研究代表者は特別支援学校に勤務する美術科教員として、病院で生活する重度の病気、障がいをもつ子どもたちと美術制作を行ってきた。本研究では、院内学級及び学外でのワークショップにおいて肢体不自由児、重症心身障がい児に対する造形活動の指導、支援を行うなかでどのような素材の選定を行い、どのような使い方の工夫を行ってきたかについて実践報告を行っていく。

肢体不自由児の多くは、筋力の弱さ、可動域の狭さなど様々な制約から作品の制作を行うことが困難な状況におかれている。特別な素材ではなく、ごく一般的な描画材を用いても、その選定、使用方法を少し工夫することで障がいをもつ子どもも制作に向かうことが可能となる。また、多くの重症心身障がい児のコミュニケーションは定型発達の乳児期のコミュニケーションに相当する。乳児期は物質や触覚を通して自己と外界を接続する重要な時期であり、それらの経験を保障する行為としての美術制作は重症心身障がい児にとって重要と考える。

障がい児者に関わる専門性をもった者が必ずしも造形活動の画材、素材の扱いに通じているわけではない。障がいをもつ多くの子どもたちがより良い環境のなかで生活し、学ぶことができるようになるためには、美術に限らず、それぞれの専門性からなる知識や技能を含む経験を開示し、分野を問わず共有することが重要である。本研究はその一例として美術教育分野で行われた実践を他分野に向けて開き、経験を共有することで障がいをもつ子どもたちの生をより充実したものにすることを目的としている。

ポスター発表

10. 多胎児をもつ特定妊婦の特徴 および助産師の支援と課題

渡邊 梨央 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
赤羽根章子 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
木村奈緒美 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
遠藤 晋作 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
上田 敏丈 (名古屋市立大学大学院人間文化研究科)
堀田 法子 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)

【目的】 助産師が訪問した多胎児をもつ特定妊婦の特徴および助産師の支援と課題を明らかにする。

【方法】 A市で特定妊婦訪問を行う助産師にインタビューガイドに沿って半構成的面接を行った。調査時期は2019年8～9月、インタビュー時間は55～67分である。調査内容は特定妊婦の背景や助産師の支援内容である。インタビュー内容を逐語録におこしSteps for Coding and Theorization (SCAT) (大谷, 2011) の手法を用いて分析した。所属大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】 対象は40～60代の助産師3名で特定妊婦訪問経験は1年半～6年、特定妊婦は3例で、双子2例、三つ子1例、うち2例は同胞がいた。妊婦の特徴は多胎児と同胞の育児を同時に行い昼夜共にマンパワーが必要で、昼間はヘルパー等の支援があるも夜間は特にマンパワー不足で健康不安定になっていた。助産師は沐浴等の育児を補完する支援や心身健康安定支援を行った。特に夜間は妊婦の健康安定が必要なため、家族に夜間のミルク授乳を支援してもらえるようミルク併用の方法を提案したが、妊婦は受け入れられず訪問拒否にまで至る事例があり助産師は提案方法に後悔を感じていた。

【考察】 マンパワー不足や健康不安定の解消には家族の協力も不可欠であり家族と話し合える場を設ける必要がある。特に妊婦の希望を尊重し、意向を確認しながら方針を決めることが重要であると考えられる。

本研究はJSPS 科研費JP19K11068の助成を受けて実施した研究の一部である。

ポスター発表

11. ロールプレイを活用した ドゥーラ(出産付き添い者)トレーニングの開発

福澤利江子(筑波大学)

【背景】2018年に発表されたWHOの出産ケアガイドラインの中で、「産婦が選んだ付き添い者による継続的支援」は分娩全期にわたり推奨されており、帝王切開等の医療介入の減少、産婦の満足度向上、新生児の健康状態の改善など様々な効果のエビデンスが確立している。しかし、国際的に、臨床現場で普及していないことが特徴的である。

【研究目的】出産中の付き添いケア提供について効果的で持続可能な方法を考案し、実施および評価を参加的行った。

【方法】文献検討、専門家パネル、質問紙調査、教材開発、国内外での実施を行った。

【結果】実例に基づくシナリオを用いて産科ケアの現場を「疑似演技」するロールプレイによるトレーニングを開発し、2019年7月～2020年1月に国内で6回、モンゴルで2回、ドゥーラトレーニングワークショップを実施した。参加者は各回20-70名ほどで、満足度も高かった。

【考察】ドゥーラを職業ではなく概念として広める方針は、この概念を提唱した故Raphael氏と故小林登氏の「誰でもドゥーラになれる」という考えやコクランレビュー等のエビデンスとも一貫性がある。本研究で開発したトレーニングは、経験や知識を問わず誰でも参加でき、失敗しても誰も傷つけず、費用がかからない利点があり、特にリソースの限られた途上国などへの適用も可能で社会的な意義が大きい。COVID-19流行のため出産付き添い者が禁止される場合の代替法としてリモート付き添いが発達する際にも、必要な知識やスキルを習得するためのロールプレイを用いたトレーニング法のさらなる開発が望まれる。

ポスター発表

12. コロナ禍の中で「できること」を考える —地域子育て支援センター B から—

鈴木祥子（認定特定非営利活動法人 NPO ぼぼハウス）

滋賀県の A 市にある地域子育て支援センター B は、2017 年 2 月に市内の大型商業施設に「敷居の低い子育て支援センター」をコンセプトに設置された。買い物ついでにふらっと立ち寄れて、遊ばせながら、相談、保護者同士の交流、情報収集もできる便利な存在で、孤育てにならないようにとの想いで運営している。

就学前の子どもと保護者が対象で、オープンから 2021 年 7 月末までの利用者数は約 13 万人。2019 年度までは、子どもの利用者のうち約 12% が 3～5 歳児だったが、2020 年度は 6% になった。これは 2019 年 10 月から始まった「幼児教育・保育の無償化」が影響していると考えられる。2020 年度は「新型コロナ感染症」予防のための 4 か月にわたる閉鎖を経て、7 月に入場制限や時間短縮などの対策を講じて再開した。このことにより、利用者数は前年度の約 1/3 になり、当然保護者同士・子ども同士の交流の場面も減少したが、それを補完する目的で、床面の利用や工作、遊具の選定し直し、動画の配信や ZOOM での講座の実施など新しい試みも実施した。

発達に関することや離乳食等日々の相談・支援は根幹をなすものだが、そこに社会の変化に伴うアイテムが加えられる。当たり前のことだが、社会とひろばの運営は密接につながっており、情勢を素早く捉え、新たな課題を見つけ、支援へと結び付けていくことが必要となる。

そこで、この 4 年半の利用者の年齢や特徴、相談内容、スタッフのメモなどを分析、社会の変化を鑑みながら、時流に合った子育て支援の場をどう構築していくのか、スタッフに必要な力や諸機関との連携なども考え、提案したい。

ポスター発表

13. 小学生から高校生までの学業の成績評定に及ぼす社会経済的地位と教育環境・学習環境との関連に関する行動遺伝学的検討

安藤寿康（慶應義塾大学文学部教授）

子どもの学業の成績評定の個人差には、家庭の社会経済的地位（世帯収入や親の学歴）や、塾やおけいこ事といった親が与える教育環境の差異を考慮してもなお、子ども自身の遺伝の影響が大きく寄与していることが小学校低学年・高学年について見出され（安藤, 2019）、さらに小学校低学年では、社会経済的地位と遺伝要因を統制してもなお、親の言いつけに従わせることや本の読み聞かせをすることといった親の子どもへの教育的関与が、環境要因として学業成績評定に影響を及ぼすことを、双生児法によって示した（安藤, 2020）。

本研究ではこれらの研究をさらに拡大、統合し、小学生から高校生までの学業の成績評定（小学校低学年を除き親・子それぞれの算数 / 数学、国語 / 英語、総合科目各教科の4段階の主観評定）の個人差に関して、社会経済的地位の影響や親がふたごに共通して与える家庭・養育環境（蔵書数や生活習慣のしつけなど）を統制した上で、親が子どもに個別に与える教育環境、ならびに子ども自身の学習行動が、遺伝要因と環境要因をどのように媒介して説明するかを、首都圏在住の2371組の双生児を対象に検討した。

これらいずれの学年においても、社会経済的地位と成績評定との相関は0.1～0.2程度の有意だが微弱なもので、これを統制しても成績評定の遺伝率は子評定で30～50%、親評定で50～70%となった。遺伝を統制してもなお、親が読み聞かせやきちんとしたしつけをすることの教育効果が見出され、また成績評定への遺伝効果には子ども自身の学習時間や家庭学習、おけいこ事などへの従事が関わっていた。

ポスター発表

14. 平成の大合併における市町村の保育の変遷 — 過疎関係市町村の合併協議会に着目して —

西垣美穂子（明星大学）

平成の大合併とは1999年～2010年に基礎自治体の行財政基盤確立のために、政府主導で自治体を広域化し、人口減少・少子高齢化等の社会経済情勢の変化に対応することであった。1999年に3,232ヶ所あった市町村は2010年には1,727ヶ所まで減少し、その内、過疎関係市町村数は776ヶ所となり36.3%を占めた。また市町村が広域化したにも関わらず、年々過疎関係市町村が占める割合が増加し、財政基盤が脆弱な市町村財政の効率化、地域インフラへの対応が課題となった。

さらに合併を進めていく上で、過疎関係市町村の特色、文化、地域インフラのあり方を、いかに住民の意見を取り入れながら実施していくことができるのかが、地域に住み続けていく上で欠かすことができない。特に小規模な地域における広域化や効率化の推進は、保育や教育施設の統廃合につながり、地域の保育環境を変化させることになるからである。

そこで本報告では市町村合併を選択した市町村のうち、過疎関係市町村ではどのような保育環境（保育所、子育て支援、幼児教育施設等）を自治体の広域化や財政効率化を進める中で選択したのか、そしてそれに至る経過を明らかにした。

具体的には、総務省「平成11年度以降の市町村合併の実績」より「保育所、保育サービス」に関わる取り組みを行なった22ヶ所のうち、過疎関係市町村にあたる16ヶ所を対象とした。分析については総務省合併デジタルアーカイブ、各市町村の合併協議会の議論、広報誌の他、財政規模等のデータを利用した。その結果として合併を選択することで、保育料の値下げ（無料化）、新たな幼保一元化施設の設置、広域地域からの保育所入所の実施、給食サービスの拡充のいずれかを実施していた。

ポスター発表 Room2

前半 16:00～17:00 司会進行 小林 美由紀

15. 保育者が専門知識を学び続けることは、多様な子ども主体の保育の要
寺井 薫
16. ASD 児の思いを受け止める際の保育者に求められる対応の質：保育場面の関与観察から
頼 小紅
17. 放課後等デイサービスにおける物的環境調整によるコミュニケーション行動の促進
に関する事例報告
伊藤 貴大
18. 「痕跡」から探る他者の営み－「つぶされた空缶」の考古学的手法による分析の試み－
水野 友有
19. 保育者の記録から読み取る幼児の集団としての育ち～卒園記念文集などの分析を通して～
金 瑛珠
20. 性役割期待によって生じる男性保育者のナレッジベース形成について
古谷 淳
21. 夜間保育を行う認可保育施設長に生起する心情の考察：子どもの育ちの環境をめぐって
大江 まゆ子

後半 17:00～18:00 司会進行 佐々木 玲子

22. 言語機能 Triple Mirror Neuron 起源論 脳の言語機能の起源を人間行為を支える Enactive
Brain II に探る
仁木 和久
23. 人間行為と「学びと成長」を支える脳の拡張モデル Enactive Brain II の提案
仁木 和久
24. 学校教育の成功をどう定義づけるか？－ Enactive Brain の仕組みとその発達の観点から－
緩利 誠
25. オンライン式授業や保育実習が保育士のキャリア形成に与える影響に関する研究
鳥海 弘子
26. 大学生は絵本体験をどのような時に思い出すのか
梅田 真樹
27. 幼児のモノのやりとりにみられる特徴 –3 歳児クラスと 5 歳児クラスの比較
廣瀬 翔平
28. 「幼保の時間」の音楽番組にみる領域〈音楽リズム〉から〈表現〉への変化の対応
葉口 英子
29. 継続的な遊び込み経験が子どもの遊び範囲の拡大と身体活動量に与える影響
森谷 路子

ポスター発表

15. 保育者が専門知識を学び続けることは、 多様な子ども主体の保育の要

寺井 薫（ルーテル学院大学大学院・みどり保育園）

「保育所保育指針」が改定され、乳幼児期の子どもの保育は、子ども主体の遊びを中心とした活動を通じ育むとされる。子ども主体の活動の場は、子どもの選択の自由が担保され、子どもの興味関心が尊重された場として構成される。保育者は環境に呼応する子どもの姿を見守り、丁寧な観察を経て子ども理解に努める。個別の子どもの発達の最近接領域を読み取り、子どもの思いやテーマを、時に保育者も遊びに参画し行為や問いかけを通じ共有する。共感を通じ遊びの展開を支え継続的な学びを実現する。

しかし、保育現場では、子どもの行為は全てがその子にとっての表現であると認識しながらも、個別の行為の意味を保育者が理解しきれずに対処する場面がある。それは、子どもの持つ顕在力によって保育者自身の反応が引き出されている状況とも考えられる。

一般の保育施設で重度重複障害児を含む多様な子どもの保育が求められる昨今、子どもの行為を表現として読み取り受容しきる為には、保育者自身が子ども理解に困難を感じる状況を出発点として学びを得る事が必要と考える。

そこで、本発表では、「子どもの顕在力の強弱と保育者の援助姿勢」の関わりを図示し整理した上で、必要となる保育者の専門知識の領域等の提示を試みたい。

目の前の子をより深く理解したいという動機から得た知識は、多様な育ちを抱える子どもと保育者を、ポルトウルニエの述べるところの「我とそれ」ではなく「我と汝」の関わりへ導き、保育者と子ども・子ども同士の育ちあいを実現する要になると考える。

ポスター発表

16. ASD 児の思いを受け止める際の保育者に求められる対応の質：保育場面の関与観察から

頼 小紅（京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程）

対人関係が苦手な ASD 児にとって、保育者が怖い存在ではなく、自分に優しく接してくれる人であることが、ASD 児と保育者との人間関係づくりの第 1 歩である。そのカギを握るのは保育者の当該児の思いを「受け止める」働きである。この働きには質の違いや個人差があることが指摘されているが、その点に関する十分な記述的研究はこれまでなされていない。そこで本研究では、制止が必要になる保育場面において、保育者の「受け止める」対応の中身を記述的に明らかにすることを試みた。方法は鯨岡（2005）の関与観察とエピソード記述により、A 認定こども園を訪れて当該の ASD 児を関与観察した。そこで得た制止に関わる二つのエピソードの結果から、①保育者の「受け止める」ことの質とその積み重ねが、当該児と保育者との関係性のありように深く影響し、当該児の保育者への信頼感と自分自身の自己肯定感や意欲に結び付いていることが示された。②この二つのエピソードから、思いを「受け止める」ことは単純に当該児の思いを肯定することでも共感することでもないことが明らかになった。③保育者は制止する働きかけをしながら内面では当該児の思いを受け止めるというように、そこに微妙な捻じれが生まれているのが分かった。ここに「受け止める」ことの重要な「質」が立ち現れていると考えられる。こういう質の高い「受け止める」対応が ASD 児との関係性の構築には必要である。

ポスター発表

17. 放課後等デイサービスにおける 物的環境調整によるコミュニケーション行動 の促進に関する事例報告 —応用行動分析学的観点から見た支援の考察—

伊藤 貴大 (子ども発達支援センターつむぎ浦和美園)
大塚 由美子 (子ども発達支援センターつむぎ浦和美園)
山本 ありさ (子ども発達支援センターつむぎ浦和美園)
小松 愛実 (子ども発達支援センターつむぎ浦和美園)
高橋 涼介 (子ども発達支援センターつむぎ浦和美園)
大久 保優介 (社会福祉法人どろんこ会)

【目的】当児童発達支援センターでは、ガイドラインに基づき、自発的な行動が主体的な行動へと変容していくことをねらいとして活動を展開している。今回は放課後等デイサービスで行った物的環境調整を中心とした支援を、コミュニケーション行動を中心に記録し、応用行動分析学から考察することを目的とする。

【方法】小学校1年生男児1名(以下、A児)を対象とした。A児は他児とのコミュニケーションが苦手であり、一人遊びが多かった。まずはA児の日常の様子 of 行動観察を行い、コミュニケーション行動の生起頻度を記録したうえで、どのような支援を行えば行動の増加に繋がるかを検討した。コミュニケーション行動は3つに分類し、それぞれ一度でも観察された場合は正反応とした。

【結果】各コミュニケーション行動はBL期においてはほとんど確認されなかったが、自由場面で他児が行っていた買い物遊びに参加しようとする様子が見られた。そこで、A児が興味を持てるものを物的環境として設定した買い物遊びを行ったところ、BL期に比べて行動の生起頻度が上昇し、別場面への般化も確認された。

【考察】子どもの主体性を損なわないような物的環境調整を行ったが、応用行動分析学の観点から支援の経過を記録、考察した場合でも一定の効果が確認された。今後、対象児を増やし、記録することで、その有効性を検証していく。

【倫理的配慮】研究発表に関して対象児の保護者より口頭と書面にて同意を頂いた。

ポスター発表

18. 「痕跡」から探る他者の営み — 「つぶされた空缶」の考古学的手法による分析の試み—

水野 友有 (中部学院大学)

障害児・者の意思決定支援とは、「可能な限り本人が自ら意思決定できるよう支援し、本人の意思の確認や意思及び選好を推定し、支援を尽くしても本人の意思及び選好の推定が困難な場合には、最後の手段として本人の最善の利益を検討するために事業者の職員が行う支援の行為及び仕組み（厚労省，2017）」とされ、支援者の観察力だけでなく、洞察力や思考力などの「目に見えない部分を探る力」が求められるようになった。「支援を尽くしても」という表現は、意思決定させるための積極的解釈や拙速な結論ではなく、「推定作業の試行錯誤を重視する」と捉えることができる。

本研究では推定方法の検証を目的とし、人類の物質文化の痕跡を通して社会や文化の変化を研究してきた考古学的手法を導入し、A氏(知的障害を伴うASD成人)がつぶした缶61本について分析した。①形態・素材・デザイン・内容物、②押圧痕の部位と形態を基準に分類した結果、A氏の缶における選好と加工プロセス（第1段階：背面下部の押圧、第2段階：中央ロゴへの押圧、第3段階：中央ロゴを起点とした絞曲）が推定できた。このようにA氏の「缶をつぶす」行為を障害特性（興味の限局と常同的・反復的行動）としてだけでなく、考古学的視点から、「加工する」行為として捉え直したことにより、缶加工における「A氏による独自の技」が見出された。なお、A氏の保護者に匿名性と研究協力への自由意志、研究の目的を説明し、口頭および書面で同意を得た。分析では、林直樹氏（岐阜県立関高等学校教諭・日本考古学協会会員）に助言をいただいた。

また本研究は、JSPS 科研費 JP21K02394 の助成を受けたものである。

ポスター発表

19. 保育者の記録から読み取る 幼児の集団としての育ち ～卒園記念文集などの分析を通して～

金 瑛珠（東京未来大学）

都内 A 保育園の年長組でのある保育実践（8月～3月）に関連する保育の記録を収集し、保育者は幼児の集団としての育ちをどのようにとらえ、どのように開示していったのかについて分析を行った。ある保育実践とは、紙芝居「ロボット・カミイ」（作・古田足日）がきっかけとなり、8月に子どもの発案によりカミイとチビゾウ作りをし、それ以降、ダンボールで製作したカミイとチビゾウがクラスの仲間となり、共に園生活を送った子どもたちの姿であり、子どもたちの姿を保育者が記録したものの一部を分析の対象とした。

保育者は保育を実践する者であると同時に、保育の場で子どもたちと共に生活をする者である。共に生活をしながら、子ども一人ひとりの育ちのみならず、集団の育ちに立ち合い、適宜、必要な援助を行い、保育実践を記録する。本研究では、卒園時に作成された「卒園記念文集」、日々の保育の様子を伝える保育室前の「その日の記録（掲示物）」や毎月発行される「園だより」の中の「各クラスより」の記録に記された内容を分析し、保育者が幼児の集団としての育ちを保護者とどのように共有したのか、保護者にどのように開示したのかについて考察した。

結果からは、保育所保育指針において明記されている「育みたい資質・能力」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、子どもの主体的な活動を支え、その経験を丁寧に読み取り、経験内容の意味を丁寧に伝えることによって保護者とも共有することが可能であり、幼児期の子どもの学び、集団としての育ちについても保育実践を丁寧に開示することによって共有することが可能であることが明らかになった。専門性に基づく保育実践の開示の意義をも再考することができた。

ポスター発表

20. 性役割期待によって生じる 男性保育者のナレッジベース形成について

古谷 淳（聖ヶ丘教育福祉専門学校）

世界的にみて、男性が保育および幼児教育に従事することは未だ稀である。日本においても、男性の幼児教育業界への参画は、男女平等を実証し、かつ保育者不足を解決する手段として受け入れられつつある。実際、一部の欧州諸国ではすでにそうした手段として受け入れられている。多くの国では、保育・幼児教育従事者の専門性を向上させる方針も見られる。

日本においても、子どもに対する社会的・教育的成果を向上させ、保育・幼児教育サービスを利用しやすくするといった目標を達成したいと考える政策レベルと、保育・幼児教育の「プロ」という概念の認識を高めたいとする幼児教育業界レベルの両方を契機として、こうした傾向が発生している。この傾向は、他国においてもみられる。

家族との同一性を作る観点から、男性保育者がロールモデルを演じることは、男性保育者の役割を明確に維持し、彼らが専門性を有するナレッジベース形成を構築することに繋がる。しかし、どのような男性が求められているのかの問題、あるいは男性であることの複数のモデルをどのように許容するのかという問題は、まだ解決されていない。これは、ロールモデルを演じることが、おとなと子どもとの協同作業の機会を提供するというよりも、子どもが学習するための手段、または子どもへ教育を施す手段として見られているためである可能性が一部に存在することも否定できない。男女差と男女平等に関する問題を追求し、同時に保育・幼児教育の業務における「基本」と「例外」とは何かを追求することで、保育・幼児教育に従事することとは何か、極言すれば、保育・幼児教育とは何のための存在であるのかという議論の道が開ける可能性がある。

Equal Opportunities Commission (EOC) (2003) How Can Suitable, Affordable Childcare Be Provided for All Parents Who Need to Work? EOC submission to the Work and Pensions Select Committee Inquiry, February. <http://www.eoc.org.uk/cseng/policyandcampaigns/workandpensionsselectcommitteeresponse.pdf>

内閣府.(2020). 幼児教育・保育の無償化に関する自治体向け FAQ【2020年10月30日版】
https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/musyouka/pdf/faq_20201030.pdf

文部科学省.(2019). 幼児教育の現状, 幼児教育の実践の質向上に関する検討会<参考資料3>
https://www.mext.go.jp/content/1421925_08.pdf

ポスター発表

21. 夜間保育を行う認可保育施設長に 生起する心情の考察： 子どもの育ちの環境をめぐって

大江 まゆ子（芦屋大学／武庫川女子大学大学院）

【目的】2019年に実施された全国夜間保育園連盟の調査から降園の深夜化に伴う母子世帯への個別支援ニーズの高まりが示されたが、深夜保育の大半は認可外保育施設が担っている。夜間保育を行う認可保育施設が増えない要因の一つに夜間保育への偏見や社会的理解のなさが先行研究で指摘されている。本研究は夜間保育内外の声を最も敏感に感受しうる立場の施設長の心情に着目し、語りから夜間保育をめぐり理解されやすい内容と理解され難い内容の探索的検討を目的とする。

【対象・方法】所属大学院倫理委員会の承認を得て施設長2名に2020年8月にZoomを用い、①夜間保育を要する子育て家庭の状況②保護者の姿③保育者の姿④夜間保育をする中で思うことのインタビューを実施した。語りの分析は語りの背景にある関係性と心情の観点で行う。大学院生1名の協力を得てランダムに抽出した語りの解釈比較から捉え方の一致不一致の検討を行う。

【結果と考察】評定者間における解釈の一致は①保護者の不安定な姿への心配、④夜間に及ぶ仕事でも職業選択の自由が保障される点への肯定的心情と子どもの生活リズムに影響が及ぶ点への危惧であり、これらは伝わり易い内容と考えられる。語りの関係性、心情とも解釈不一致②のみで協力者は何かしようとの施設長の前向きな思い、調査者は親子関係へのメタ視点から生活リズムや遊ぶ権利の点で保護者の影響を受けざるを得ない状況にやり場のない思いを捉え、最善を模索する思いと本来は子どもの育ちに望ましいとは言い難い状況へのやるせなさがなく、家庭や保育施設だけで応じきれない問題が夜間保育を要する子どもの育ちの環境にあることが考えられる。

ポスター発表

22. 言語機能 Triple Mirror Neuron 起源論 ～脳の言語機能の起源を人間行為を支える Enactive Brain II に探る～

仁木 和久 (慶應義塾大学社会学研究科・訪問研究員)
 緩利 誠 (昭和女子大学総合教育センター・准教授)
 安藤 寿康 (慶應義塾大学文学部・教授)

本論では、人間行為を支える脳システム Enactive Brain II の中に言語システムが人間の行為をささえる脳機構として存在すること、さらに「背側知覚認知の脳システム」に属す前部頭頂葉 (APC) の音声知覚システムと運動前野の音声発声システム、「腹側認知脳システム」に属すブローカー野 (いわゆる言語野) の何れもが、自分の行為に対し反応するだけでなく他者の行為の観察にも反応するミラーニューロン (MN) を持つことを指摘し、行為をささえる脳のメカニズムとして言語機能を捉える言語機能 Triple Mirror Neuron 起源論を提案する。

行為の感覚・運動統合 (知覚) 系列と言語系列の記憶が PCC (後部帯状回) と PPC (後部頭頂葉) に蓄積され「自己」が形成され、その前方の APC に環境対象を知覚する {バイズ学習で内部モデル構成・利用する} 知覚推論・予測器が形成され、運動前野に運動を伴う能動的知覚推論・予測器が形成される。この予測器の内、自己と他者情報の何れにも反応する予測器が MN であると新定義する。

行為をささえる脳システムの中に、3つの MN を核とした言語システムがあることは、言語と行為がより一体化した存在であり、自己行為は内言 Action Language (I) を伴うこと、他者音声に基づく音声知覚を行う場合は、Action Language (You) として他者の行為を予測できること、具体的知覚対象がない場合、語彙や概念の信念に基づいて階層的予測群を駆動することにより抽象的な言語表象処理が可能になることを示す。また、第一言語の初期習得を、マザーリング環境の中での音声知覚、音声発声の MN 型予測器の相互強化学習として本理論は説明する。

ポスター発表

23. 人間行為と「学びと成長」を支える 脳の拡張モデル Enactive Brain II の提案

仁木 和久（慶應義塾大学社会学研究科・訪問研究員）
緩利 誠（昭和女子大学総合教育センター・准教授）
安藤 寿康（慶應義塾大学文学部・教授）

本論では、人間の学びと成長を考察する為に提起した人間固有の行為（＝意欲と意図をもった行動）を支える脳モデル Enactive Brain の3つの脳システム {「外部認知情報の脳システム」、記憶や自己システムが属する「内部自己情報の脳システム」、「顕著性ネット (SN)」、環境対象に対して主体的に働きかける「背側知覚認知の脳システム」と外界情報を分析的にカテゴリ認識し、宣言型知識を生み出す「腹側認知の脳システム」の2つの脳システムを付加・拡張した Enactive Brain II モデルを提案し、自己情報の脳システムの「自己」がどのように拡張されるか、環境対象に対して主体的に働きかける知覚認知の役割と仕組み、道具や義足を使っての知覚拡張、知覚宣言型知識が生み出される脳機能について論じる。さらに、この付加した2つの脳システムの中に言語機能が生まれる必然性と言語機能の行為への役割を論じ、最後に、一般知能・WMの機能を持つ「外部認知情報の脳システム」が「背側知覚認知の脳システム」へ接続し、その機能を拡張させることの含意を「学びと成長、高度な自己スキーマの形成」と関連づけて議論する。

以上のように、Enactive Brain II は、従来、知覚や記憶の一部を担う単なる知覚・認知脳システムと考えられがちであった脳システムの積極的・活動的 (Enactive) な役割を明らかにし、身体的知能や感情知能の持つ諸特性を保ちながら、人間行為の言語を含む認知機能的側面の理解をより深めることができるなど、人間行為者の主体的・能動的な学習 (アクティブ・ラーニング) や社会的協調活動について探求する、脳科学的エビデンスに基づいた研究フレームワークであることを示す。

ポスター発表

24. 学校教育の成功をどう定義づけるか？ － Enactive Brain の仕組みとその発達の観点から－

緩利 誠（昭和女子大学総合教育センター・准教授）
仁木 和久（慶應義塾大学社会学研究科・訪問研究員）
安藤 寿康（慶應義塾大学文学部・教授）

本発表の目的は人間に固有な行為を支える Enactive Brain の仕組みとその発達の観点から、学校教育における成功の定義を試論的に考察することである。教育改革はその時々社会的要請に応えることを中心に進められてきたが、とりわけ、子どもの発達状況に即して教育の成否やその程度を継続的にモニターし、その後の教育改善に生かそうとする体制は必ずしも十分とはいえない。そもそも何をもって学校教育の成功とするのか、それ自体が何らかの評価可能な形式でもって操作的に定義づけられてこなかった。

人間に固有な行為を支える Enactive Brain は、「外的認知情報の脳システム」と「内的自己情報の脳システム」、「顕著性ネット」の3つの脳システムで構成され、それらが協調的・調和的に作動する諸経験の蓄積を通じて、生涯にわたり、発達の行為主体性を獲得・向上・維持していくことに重きをおく。当該システムの作動には「ポジティブ感情」「没頭・主体的関与」「良好な対人関係」「意味の実感」「達成」「強みの発見・活用」が関連しており、学校教育は意図的・組織的・継続的にその学習・発達プロセスの一部を（可能な限り）支える仕組みや仕掛けをデザインすることが求められる。

本発表は、ここでいう行為主体性をウェルビーイングの根幹と位置づけ、教師と子どもによる教えと学びの相互行為を通じたウェルビーイングの増進こそが学校教育の成否判断の基準であることを提案する。そのうえで、充足すべき発達のニーズを「人間能力の社会的拡張モデル」として整理し、そのニーズ充足に学校教育がどこまで寄与できているかをモニターする方法について仮説的な枠組を提示する。

ポスター発表

25. オンライン式授業や保育実習が保育士のキャリア形成に与える影響に関する研究

鳥海 弘子 (秋草学園短期大学)
浅井 拓久也 (秋草学園短期大学)

新型コロナウイルス感染症のため、多くの大学や短期大学では Zoom や Google meet を活用したオンライン式の授業や保育実習が導入されている。オンライン式授業や保育実習は新型コロナウイルス感染症の流行によって取り急ぎ導入された側面が強く、それゆえにその効果の測定について現在様々な研究がなされている。しかし、こうした研究の中心はオンライン式授業や保育実習を学生がどう把握しているかというものであり、実習施設の保育士の理解や認識を問うものではなかった。オンライン式授業や保育実習が保育士のキャリアにどのような影響を及ぼすと保育士が考えているかは実習内容や実習受け入れのあり方に大きな影響を及ぼすことが予想される。そこで、本研究では、実習施設の保育士 120 名を対象に質問紙調査を行い、保育に関わる 25 項目についてオンライン式中心の授業や保育実習と対面式中心の授業や保育実習を比較した。その結果、ほぼすべての項目で対面式授業や保育実習のほうがよく学べるという回答が大半であった。オンライン式授業や保育実習のほうがよく (やや) 学べるという回答は、「子どもの最善の利益の考慮や子どもの人権へ配慮をする。」、「地域社会にある様々な資源を活用する。」、「自分が担当するクラスの指導計画を作成する。」、「保育の記録を適切に作成する。」に限定されていた。保育士養成校卒業後に保育士としてキャリア形成していくうえでは保育士は対面式授業や保育実習のほうがよいと考えており、オンライン式授業や保育実習から学べることは限定的であると考えていることが推察された。本研究は秋草学園短期大学研究倫理委員会より承認を得て実施した。

ポスター発表

26. 大学生は絵本体験を どのような時に思い出すのか

梅田 真樹 (京都西山短期大学保育幼児教育コース)

幼少期に絵本に触れた大人は、どんな時に絵本を思い出し、どんな感情の変化があるのだろうか。今回、〇大学の学生44名を対象に、普段の生活の中で絵本のシーンを思い出すことがあるのか、あるとすればどのような時に思い出すのか、思いだした時にどのような感情をもつのかについて、アンケート調査を行った。絵本をどのような時に思い出すのかについては、①『何かを見た時に絵本のシーンやストーリーを思い出す』という回答(「深夜に歩くと押し入れの中に広がった世界を思い出す」や「ベッドの中に入った時に、そらまめくんのふかふかのベッドを思い出す」等)が16名、②『何かや誰かを見た時に絵本を読んだことを思い出す』(「本屋に行くとき好きだった絵本を思い出す」や「たまに弟に会ったとき、一緒に絵本を読んだことを思い出す」等)が9名、③『何かを経験した時に絵本のストーリーを思い出す』(「死について考えたときに、初めて死を意識したときに読んだネコの絵本を思い出す」や「理不尽なことが起きたときに、ゾウのことを思い出す」等)が8名、④『絵本のフレーズを思い出す』(「どうにもならなくなった時に絵本のフレーズ いやだねつのなんかあってと言ってしまう」)が1名、⑤『絵本を思い出すことはない』が10名であった。

絵本を思い出した時の感情については、①は「突然思い出すだけ」や「なつかしい」、②は「なつかしい」や「幸せな気持ちになる」、③と④は「がんばろうという前向きな気持ちになる」という回答が多かった。これらの結果から、幼少期の絵本を読んだ体験は、大人なってからもずっと心を支え続けていると考えられる。

ポスター発表

27. 幼児のモノのやりとりにもみられる特徴 -3歳児クラスと5歳児クラスの比較-

廣瀬 翔平 (立命館大学総合心理学部)
小林 優花 (神戸女学院大学大学院人間科学研究科)
園田 和子 (せつつ遊育園)
園田 裕紹 (とりかいひがし遊育園)
矢藤 優子 (立命館大学総合心理学部)

幼児にとって保育園や幼稚園は家族以外の他者と集団生活を経験する初めての場となる。集団生活では、遊びや食事などの生活を同じ年代の幼児と共にすることで他者との関わり方を学んでいく。その中では自己と他者との要求を調整していく場面にたびたび遭遇する。要求の調整が必要となる代表的な場面の1つとして、おもちゃ等のモノのやりとりがあげられる。本研究は、3歳児クラスと5歳児クラスの幼児の遊び場面を観察、比較し、それぞれのクラスの幼児の間でみられるモノのやりとり場面の特徴を明らかにすることを目的とする。3歳児クラスと5歳児クラスの部屋での自由遊び場面を撮影し、分析した。モノのやりとりでみられた行動の生起頻度の比較、さらにKJ法による個別のエピソード分析を行なった。なお、本研究は研究の詳細について園長会と保育士全体への研究説明、保護者会での承諾を得ており、データの厳重管理や分析の際の匿名化などの倫理的配慮のうえ実施された。結果として、モノのやりとりは5歳児クラスと比べて3歳児クラスで多く生じたこと、また3歳児クラスではモノを所有していなかった幼児がモノを借りられることが少なかった。また、KJ法の分析から、似たような行動であってもやりとりの展開が年齢によって異なること、一方でモノと接触している状態が所有していると判断する考え方が年齢に関わらず共通していることなどが明らかになった。本研究の結果から、年齢が上がることでモノのやりとりが定型化しスムーズになること、似た方法であっても場面によって有効的かどうかが変わることからそれぞれの方法がもつ機能が変わること、などが示唆される。

ポスター発表

28. 「幼保の時間」の音楽番組にみる領域〈音楽リズム〉から〈表現〉への変化の対応

葉口 英子 (ノートルダム清心女子)

NHK 教育テレビの幼児向け番組「幼稚園保育所の時間」(「幼保の時間」)は学校放送として幼稚園教育要領に準拠し制作されてきたため、教育改革による幾度かの要領の改定に伴いその内容も変化してきた経緯がある。とりわけ1989年の要領の改訂は、本研究が対象とする音楽番組にとっては、1956年以降から実施されてきた領域〈音楽リズム〉が領域〈表現〉となる大きな転換点となった。

本研究はこの時期に放送された『ぷるぷるぷるん』(1988-89年)『ともだちいっぱいうたってあそぼ』(1990-94年)を対象とし、新領域〈表現〉への移行に伴いそれまでの番組とどのように変化したのか、前番組『なかよしリズム』(1966-88年)との比較とともに幼児を取り巻くメディア環境とともに解明する。手続きとして、テキストと映像による内容分析と当時の制作者の発言も参考にし、両番組が要領の内容をいかに取り入れ視聴覚テキストとして具現化したのかを考察する。

その結果、『プルプルプルン』は“音楽的な出会い”として「メロディーとリズム」、「音のゲスト」、「リズム体操」の3構成とし、幼児に自然な形で音楽に親しみをもたせる内容となった。後続の『ともだちいっぱいうたってあそぼ』は幼児の音や声に対する興味や遊び体験による音楽体験を重視した構成となり、“遊びの意識”や“インパクト”を強調する内容となった。

90年代初頭は幼児を取り巻くメディア環境や学校放送という教育メディアの存在も大きく変容を迎えた時期である。そうした背景にあって番組では新要領への対応や保育現場への配慮を含むさまざまな試行がおこなわれたことが明らかとなった。

ポスター発表

29. 継続的な遊び込み経験が 子どもの遊び範囲の拡大と 身体活動量に与える影響

森谷 路子 (株式会社ティップネス)
山田 悟志 (静岡産業大学)

- 【目的】 大型複合遊具などを配置した遊び場で継続的に遊び込む経験が子どもの遊び範囲の変化ならびに身体活動量に与える影響を検証することを目的とした。
- 【方法】 大型複合遊具などを配置した子ども向けの運動あそび施設にて、1回60分の運動あそび教室全12回に参加した年中・年長の子どもの99名の中から9名(年長4名・年中5名、男子4名・女子5名)を選んで初回と最終回の子どもの動きを紙上に記した。記録対象は大型複合遊具などを使って子どもたちが自由にあそぶ時間(30分間)とした。あわせて9名の子どもの腰部に3軸加速度計を装着して計測し、その加速度から当該時間中の活動強度別の身体活動量を算出した。
- 【結果と考察】 9名の子どもの初回と最終回の活動量計装着時間あたりの身体活動を比較すると、座位行動時間(最終回対初回比42.4%)と軽強度身体活動時間(同59.5%)が最終回において有意に減少し($p<0.01$)、高強度身体活動時間(同266.1%)と中高強度身体活動時間(同176.2%)が最終回において有意に増加しており($p<0.01$)、継続的な教室参加を通じて子どもたちはより身体を使った遊びを行っていた。歩数は最終回対初回比203.6%と有意に増加しており($p<0.01$)、初回よりも広い範囲を使って、同じルートで繰り返し遊んでいた。そのため、子どもたちの最終回の動きの軌跡は初回よりも大幅に密になっていた。このことから、子どもが遊び込む経験の中で探求範囲を広げ、自分のお気に入りの遊びコースを見つけてスピードを上げて遊ぶようになっていたことが確認された。

ポスター発表 Room 3

前半 16:00～17:00 司会進行 竹下 秀子

30. 中高生のコロナ禍休校期間における生活の変化と親子関係および精神的健康との関連
酒井 厚
31. 社会的ハイリスク状態にある子どもへ包括的性教育支援の実践報告
安藤 布紀子
32. 知的障害特別支援学校高等部におけるVRを活用した授業の実践試行
岩井 祐一
33. ICTを活用して子どもの科学的概念を育む物語創作ワークショップの開発と実践
大崎 章弘
34. 保育学生のICT導入に関する意識
渡辺 直人
35. 生命とのつながりを育む移動動物園における保育の環境設定と子どもの学びの評価
内海 緒香
36. 幼児期における科学的探究心の芽生え－探索的な調査結果からの一考察－
末松 加奈

後半 17:00～18:00 司会進行 塘 利枝子

37. 創造的なDigital Playを支援するオンライン・ワークショップに向けた予備調査
佐藤 朝美
38. ニュージーランドの保育評価 learning story に基づく、日本の森のようちえんの活動の分析
藪田 弘美
39. 幼児のピアノレッスンにおける指導者の発話分析②
油川 さゆり
40. 幼稚園の帰りのあいさつルーティンにおける保育者の意図－3歳児と4歳児の比較検討－
鈴木 幸子
41. わらべうたの音楽構造と私たちの音楽認識の変容
松崎 真実
42. 日本語指導のための「先行学習」－日本人学校での実践の分析を通して－
渡邊 花穂
43. 絵本の研究－絵本に描かれた主人公からその時代の子ども観・教育観を読み解く試み－
戸次 佳子

ポスター発表

30. 中高生のコロナ禍休校期間における生活の変化と親子関係および精神的健康との関連

酒井 厚（東京都立大学）
渡辺 誓司（NHK 放送文化研究所）

新型コロナウイルスの流行により、世界各国で休校措置や在宅勤務が講じられ、多くの家庭が従来とは異なる生活を経験することになった。コロナ禍に伴う生活の変化は、親子関係や子どもの精神的健康に悪影響を与える可能性が指摘され始めている。

本研究では、2019年9月に中学生がいる親子に実施した調査の対象者に1年後のフォローアップ調査を行い、コロナ禍前の当時の親子関係や、2020年4-5月の休校期間中の生活変化の経験が、その後の親子関係と子どもの精神的健康にどう関わるかを検討した。なお、本研究はNHK放送文化研究所内における倫理審査を経て実施している。

調査に参加したのは605家庭であり、母親と子どもが1時点目（T1）と2時点目（T2）に親子関係を測定するNRI尺度に回答し、相手との関係性を今後も継続できると思うか（信頼関係）や喧嘩や葛藤が多いか（対立関係）を評価した。また、T2ではそれぞれが休校期間に経験した生活変化を尋ねる項目に回答し、子どもはストレス反応尺度にも回答した。

共分散構造分析に基づくパス解析の結果、母親と子どもが双方に抱く関係性評価は、T1の状態がT2でも維持される傾向が見られ、またT2における子どもが評価する母親との信頼関係の低さや対立関係の高さが、ストレス反応の高さを有意に予測していた。また、親子が休校期間中に経験した生活変化の高さは、ストレス反応の高さを直接的に予測するとともに、T2の子ども評価による母親との信頼関係の低さを介して間接的に関わっていた。そのため、休校期間中の生活変化は、親子の良好な関係を損ねることで、子どもの精神的ストレスを高めることが示唆された。

ポスター発表

31. 社会的ハイリスク状態にある子どもへ包括的性教育支援の実践報告

安藤 布紀子 (関西医科大学看護学部)

川崎 有紀 (関西医科大学看護学部)

上村 由紀 (大阪府済生会大阪乳児院)

中村 礼子 (なかむら助産所)

酒井 ひろ子 (関西医科大学看護学部)

【目的】平成30年厚生労働省「乳児院・児童養護施設の高機能化及び多機能化・機能転換、小規模かつ地域分散化」の通知を受け、本学は乳児院と協定を締結し「予防再統合事業」を行っている。経済的、文化的、社会的に不利な家庭の多い小中学校からモデル校を選定して、生きる力や心を育むための教育を基盤にライフスキルとしての包括的性教育を展開している。本報告はモデル中学校の中間報告にあたる。

【方法】中学1年生から3年生を対象に、包括的性教育を行い、各学年末に「自尊感情測定尺度(東京都版)を含む質問紙で評価を行った。この尺度は「自己評価・自己受容」「関係の中での自己」「自己主張・自己決定」の3因子で構成される。調査期間は2020年4月から2023年3月である。

【倫理的配慮】本事業実施大学の倫理審査委員会で承認を得た(番号2019216)。

【結果と考察】モデル中学校の生徒447人中、不完全解答等を除いた403名(1年生128人、2年生159人、3年生116人、男性221人、女性174人、性別無回答等8人)を分析対象とした。自尊感情測定尺度の3因子は学年間でいずれも有意差はなかった。学年ごとに男女で比較した結果、1・2年生で女性が男性より「自己評価・自己受容」「自己主張・自己決定」が低く、性別無回答等の学生は3因子とも低い傾向にあった。思春期は、対人関係の複雑化、性自認、性的志向での葛藤等で自尊感情が揺らぎやすい。自尊感情が低いと安易な性行動の末、性感染症や若年妊娠につながり、貧困や虐待の世代間連鎖のリスクをはらむ。このようなリスクを断ち切るためにも包括的性教育を通して健全な性を育むことが必要である。

ポスター発表

32. 知的障害特別支援学校高等部におけるVRを活用した授業の実践試行

岩井 祐一（東京学芸大学附属特別支援学校）

本研究は、知的障害特別支援学校高等部における仮想空間と現実空間を融合させた「VR」における授業の実践試行である。コロナ禍における現実場面での体験不足をVR体験で学習機会を創出し、教室での学びと実生活との間のブリッジとなる体験として活用の可能性を探ることを目的とした。なお、授業実践に当たっては、事前に趣旨等の説明し同意を得た上で実施をしている。

知的障害のある生徒の学習では、実際の生活場面に即して学習することで必要な知識や技能等を身に付けることが重要とされ、教科家庭の消費生活における購入方法、支払い方法等では、実際の場面を通して学習することによって知識や技能を身につけることが多かった。しかし、新型コロナウイルス感染症の蔓延で、これまでの学習が困難になった経緯を踏まえ、実際の場面を再現し学習できるようVRの活用を行った。実践では、カフェで飲み物を注文するシーンを、教員が店員役、生徒がお客となって実施した。全体的なストーリーは統一しつつ、支払方法や注文を間違えた際の対応等、生徒の実態を踏まえてシナリオを変更した。授業構成は、日常生活での実装を行えるよう① Foundational Learning（スキル・知識）、② Simulation Learning（VRシミュレーション）、③ Creative Learning（リアルアウトプット）の3つのステップで構成し実施した。

本研究を通して、知的障害のある生徒でもVR環境への適応が可能であること、仮想空間上での活動や操作も十分に行えることが本研究で示唆された。また、個々の特性や学習課題に応じてコンテンツやシナリオ等を変更することができ、多様な学びの場となった。一方で、VRコンテンツ開発や授業準備は、時間や専門的スキルを要することが多く課題となった。

ポスター発表

33. ICT を活用して 子どもの科学的概念を育む 物語創作ワークショップの開発と実践

大崎 章弘 (お茶の水女子大学)

井上 知香 (愛知淑徳大学)

末松 加奈 (東京家政学院大学)

後藤 郁子 (お茶の水女子大学)

理科教育の現場では、身近な不思議に対して子どもが主体的に観察や実験による探究の過程を通じて不思議を解消したり、新たな不思議を発見したり解決したりする経験が重要とされている。この過程では「もしこうだったら」などと推測する科学的概念を形成する力が必要であり、その獲得には子どもがどのように身近な事物を捉えるのか？ 素朴概念を手掛かりとした育成が重要であると考えられる。

本研究では子どもの幼児期・児童期に素朴概念を育むことを目的に、身の回りの事物を題材に一人称の物語を創作するワークショップを開発し実施してきた。ワークの特徴として、物語の創作において構成要素を容易に操作・編集が可能なICTを積極的に活用すること、また親や保育者が子どもに寄り添い、子どもが先導して創作活動が進行する、参加者が即興的に関与する場づくりを目指した。

ワークは幼児および小学低学年の児童と親を対象に2019年から2021年まで3回実施した。1、2回目は対面にて机上や床座で行い、創作にはiPadアプリ「ピッケのつくるえほん」を用いた。題材は1、2回目は具体的な題材を提示し、最初に科学的な見方を伝えた後に創作を開始した。3回目はオンラインZoomを活用し題材は各自の家庭にある事物を自ら探し、写真や動画でスケールを変えたものを題材に創作した。評価では、各回の保育者や親の介入過程の動画記録と共に、iPadによる創作過程の記録(1、2回のみ)およびコメント調査を行った。本ポスター発表では各回のワークの設計指針とともにその結果と検証を踏まえた開発の変遷と、得られた知見を報告する。本研究は、愛知淑徳大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

ポスター発表

34. 保育学生の ICT 導入に関する意識

渡辺 直人 (和歌山信愛女子短期大学 保育科)

【目的】 ICT 化が進む現在、教育現場においても電子機器の導入が行われている。保育でも取り入れる園が見受けられるが、一方で子どもは遊びの中で学ぶという一面もあるため慎重になっている園も見受けられる。次代の保育を担う、現在の保育者養成校学生はこれらに関してどのように考えているのだろうか。本稿では保育者養成校学生の ICT に関する意識を調査する。

【方法】 2021 年 7 月、関西地方 A 短期大学の保育科 1 年生 (24 名) を対象に ICT に関する意識調査を行った。授業終了後、Google Form を用いてアンケートを取得した。内容は「①パソコンの技術は保育にも役立つと思う」「②ユニバーサルデザイン (年齢や障害、性別、国籍等にかかわらず、すべての人が扱えること) のために、ICT はもっと保育に導入すべきだと思う」「③子どもには、あまり ICT 機器 (スマートフォン・パソコン等) を使わせない方がいいと思う」「④私は普通の人よりも ICT 機器を扱える自信がある」を問うた。分析は Spearman の順位相関分析を行った。倫理的配慮として、個人情報厳格に保護し外部に漏れることはないこと、得た情報の目的外利用はしないこと、回答・協力は任意であることを告知した。

【結果】 調査の結果、① ($M=4.59, SD=0.61$)、② ($M=4.09, SD=0.83$)、③ ($M=2.91, SD=0.97$)、④ ($M=2.09, SD=1.09$) であった。次に Spearman の順位相関分析を行った結果、「③ - ④」のペアで有意な負の相関関係が確認された ($r=-.58, p<.01$)。すなわち、自信が大きくなるほど使わせたいと思う意識が高いことが示唆された。

【おわりに】 本調査はサンプル数も小さく属性も 1 年生のみの対象としており、この点において十分であるとは言い難い。今後は広くサンプルを求めて調査を行う必要があると考える。

ポスター発表

35. 生命とのつながりを育む移動動物園における保育の環境設定と子どもの学びの評価

筆頭演者：内海 緒香（お茶の水女子大学）
 共同演者：宮里 暁美（お茶の水女子大学）
 辻谷 真知子（お茶の水女子大学）
 川辺 尚子（保育のデザイン研究所）
 山下 智子（文京区立お茶の水女子大学こども園）
 内野 公恵（文京区立お茶の水女子大学こども園）

日本の保育においてSDGs（持続可能な開発目標）は、多様性と向き合い地球市民であることの自覚を育てるために重要な取り組みと認識されつつある。保育の現場でもSDGsの理念を実現する実践内容を記録し発信することが求められている。動物とのかかわりや世話は、子どもがその動物の独特な要求について学ぶことを手助けし、情緒的な愛着や共感を育てる（メルスン、2007）。本研究の目的は、動物とふれあう経験と環境設定を記録し評価することにより、生命とのつながりを育む保育の環境設定のプロセスと子どもの学びを可視化することである。

ある都市型認定こども園における「移動動物園」での0歳児から5歳児（93名）と保育者の動物とのふれあい活動を対象とした。記録データをもとに、環境評価「5つの視点」（内海・川邊・宮里、2021）を参照枠として分析を行った。クラスごとの活動を時系列で追いながら、「5つの視点」の枠組みに基づき、抽出された現象を解釈した。保護者・家庭を子どもたちとの共通の経験に招き入れる“コミュニティ”形成、年齢が異なる子どもたちの“ウェルビーイング”に配慮しながら誘導する保育設定と保育者のかかわり、子どもたちの“深い観察”を支え援助する保育者の工夫、子どもの経験や学びに寄り添う“共感的理解”、ICTを利用し配慮児とクラスの仲間をつないだ保育者の“創造性”や移動動物園の経験を遊びに転換した子どもたちの“創造性”について考察を加える。

*保育者や保護者からは管理職との間で園内での研究に関するインフォームドコンセントが取られている。この研究は、所属するお茶の水女子大学の倫理審査の承認を得て行われた。

ポスター発表

36. 幼児期における科学的探究心の芽生え —探索的な調査結果からの—考察—

末松 加奈 (東京家政学院大学)
松原 憲治 (国立教育政策研究所)
小林 優子 (筑波大学大学院博士後期課程)
亀山 秀郎 (学校法人七松学園認定こども園七松幼稚園)

幼児期の子どもたちは、身のまわりのさまざまなものを感じ取り、試行錯誤しながら遊び、ある事象に対して疑問を持つ。その様な子どもの経験は、小学校以降の科学的探究心の基盤を創っていくと考えられる。

本研究は、幼児期および学童期の科学的探究心およびその芽生えに関する実証的調査 (JSPS 科研費 JP 20K20854) を進めるにあたり、幼児を対象に行った探索的な予備調査である。まず、イリノイ大学レダーマン教授が開発した幼児に関する科学的探究心に関する調査手法 (YCVS) を参考に、日本の文化や保育に適した調査を開発した。その後、近畿地方の認定こども園に通う年長児 26 名に対し、2021 年 8 月にオンライン上でインタビューを行った。インタビューは、「科学者」という言葉の意味付けについて問うものと、「調べること」への理解について問う 2 つの質問で構成された。

その結果、「科学者」という言葉に対して、日常的に使われたり、イメージしにくいことが分かった。また、子どもにとって「調べる」とは、実際の行為として行うものであるが、言葉と結びつけることが難しいことが見えてきた。今後は、この結果をもとに、幼児期の科学的探究心の芽生えを再定義し、調査手法を再構成する。

なお本研究は、東京家政学院大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。また、園と保護者に書面で、子どもには口頭で研究について説明し、参加の同意を得た。

ポスター発表

37. 創造的な Digital Play を支援する オンライン・ワークショップに向けた予備調査

佐藤 朝美 (愛知淑徳大学人間情報学部)
朝倉 民枝 (株式会社グッド・グリーン)

現在、幼児とデジタル技術との出会い方が、家庭や教育現場での重要な課題となっている。しかし、幼児期にどのようなデジタル体験を提供すべきかについての研究は未だ希少である。そこで本研究では、幼児期に適切なデジタル体験として創造的な「Digital Play」に着目し、支援するオンライン・ワークショップの手法を明らかにする。そのために「①創造性の最近接発達領域に働きかける効果的な Digital Play について、②ワークショッププログラムのデザインとファシリテーションの役割について、③オンラインワークショップ実践のためのシステム環境について」を要件とし、デザインを行う。本発表は、その予備調査について報告する。

Digital Play とは、「遊びを通して学ぶ」という教育的理念を背景にした「デジタル技術を用いた遊び」を指す[*]。Digital Play の活動には創造思考を促進する創造活動の要素が含まれているという。ここでの創造とは、「子どもが独自の文や絵などの創作物を新しく生み出すこと」である。創造活動から探求（探索、何をしたいか知ること）、関与と楽しさ（アイデアの試行と分析、推測、他者を巻き込む）、持続性（没入、冒険、達成）の創造思考が生じる。予備調査では、創造思考が生じる Digital Play を分類し、オンラインでの実践方法を検討した。

[*] Stephen C., Brooker, L., Oberhuemer, P., Parker-Rees, R. (2018) Digital Play and Technologies in the Early Years. Routledge.

ポスター発表

38. ニュージーランドの保育評価 learning story に基づく、日本の森のようちえんの活動の分析

藪田 弘美 (美作大学)
吉澤 英里 (星槎道都大学)
前川 真姫 (環太平洋大学)

Learning story (LS) はニュージーランドの就学前統一カリキュラムとして1969年に導入された Te Whariki に対応する保育記録として作成されたものであり、価値ある学びを評価 (assessment) するものである。本研究では、日本の保育におけるLSの活用方法を検討するため、①ニュージーランドの幼稚園教諭にLS作成方法について面接調査を行い、②日本の森のようちえんでの活動をLSで評価した。

面接調査の結果、LSの作成方法について、(1) 学びの構えの視点で子どもを評価する、(2) どのように何を学んだかで子どもの学びを分析する、(3) 何が起きたか (Notice)、どのような学びがあったか (Recognizing)、今後に向けて (Responding) の順序で記載する、(4) 子どものVoiceに基づく物語を評価の素材とすることがわかった。

以上4点を視点に、日本の森のようちえんでの保育活動の一場面 (5歳児A児) を評価した。結果、LSによる評価は、森のよちえん (子ども達の主体性を深く尊重し、且つ構造化されていない環境) での活動に有効だと考えた。その主な根拠は、(1) 自然そのものが学びの構えを育む環境になっており、子ども達はそのような環境を自ら選択して遊んでいたこと、(2) 興味・関心を持ったことに対して、どうすればそれが実現できるか試行錯誤し検証することで学びにする姿が見られたことである。

LSは、学びの軌跡として捉えられるという性質がある。しかし、本研究では局所的に捉えた評価のみになったので、今後、社会文化的な観点を背景に、全体的な視野を通して子どもの学びを捉えていきたい。

なお、本研究は美作大学倫理委員会の承認を得て実施した。また、面接、観察対象者には事前にインフォームドコンセント行い了承を得ている。

ポスター発表

39. 幼児のピアノレッスンにおける 指導者の発話分析②

油川 さゆり(玉川大学学術研究所K-16一貫教育研究センター 助教)
福富 隆志 (南九州大学人間発達学部子ども教育学科 助教)

【目的】油川(2020)は、ピアノの習い事を行っている幼児5名を対象に、ピアノレッスンの観察、分析を行い、通常のレッスンと発表会直前のレッスンにおける、指導者の発話の違いを明らかにした。本研究では、研究対象児を17名に拡大して分析を進め、個人間の差を検討する。

【方法】研究対象は、東北地方の認定こども園に通う年中年長児17名(男児:4名, 女児:13名)とピアノの指導者2名(40代女性・60代女性)。幼児の保護者と指導者に研究説明書を配り、研究の同意を得た。保護者に対し質問紙調査を行い、幼児の問題行動と自己制御機能を問うた。研究時期は、2回(通常;2017年11~12月、発表会直前;2018年3月)でレッスンのビデオ撮影を行った。指導者の発話を文字起こしした後、ユニットに分け、カテゴリー化(説明・指示・誘導・問いかけ・話題提示・足場掛け・歌・受容・承認・合図)した。評価者間一致率は $k=.81$ と高かった。

【結果】各レッスンのカテゴリーの割合の差を比較するため、対応のあるt検定を行った結果、説明に有意差が見られ、発表会直前のレッスンで指導者の説明の割合が増加していた($t=2.22$, $df=16$, $p<.05$)。各レッスンのカテゴリーの割合の差と、幼児の問題行動・自己制御機能の関連を検討したところ、内在化した問題行動と受容の間に強い負の相関関係($r=-.77$, $p<.05$)、内在化した問題行動と足場掛けの間に比較的強い正の相関関係($r=.58$, $p<.05$)、注意の移行と足場掛けの間に比較的強い正の相関関係($r=.59$, $p<.05$)が見られた。発表会直前のレッスンに向け、内在化した問題行動得点が高い幼児には、受容が減少し足場掛けが増加し、注意の移行が高い幼児には足場掛けが増加する傾向があることが示された。

ポスター発表

40. 幼稚園の帰りのあいさつルーティン における保育者の意図 —3歳児と4歳児の比較検討—

鈴木 幸子（静岡英和学院大学）
青山 昌子（静岡大学教育学部附属幼稚園）

子どもは幼稚園において日々繰り返される生活から様々な行動を学んでいく。この学びを容易にしているのが日常生活に埋め込まれたルーティンである。ルーティンは「生起順序に規則性のある複数のスロット（構成変数）から成る定型的なやりとり」を指す。毎日クラス全員の子どもたちと保育者が行う帰りのあいさつルーティンでは、集団で影響し合うダイナミックな学びの過程が明らかになっているが、そのあいさつルーティンの構成の意図については検討されていない。本発表では、帰りのあいさつルーティンを構成する保育者の意図について、3歳児クラスと4歳児クラスの比較から検討することを目的とする。

2021年4月～7月3歳児クラスと2012年4月～2013年3月4歳児クラスにおける両時期の観察記録と、両時期の担任A保育者にルーティン構成の意図についてインタビューを行い文字化したものを分析対象とした。子どもの保護者には研究協力の理解を得ている。

結果、3歳児クラスの帰りのあいさつルーティンは4歳児よりも、「注意喚起」と「あいさつの完了」の間にある子どもたちへの「フィードバック」（姿勢の整え等）のスロットが少なかった。また、4歳児が一般的なあいさつなのに対して3歳児は手遊びのようであった。A保育者があいさつルーティンの構成を変える意図は、1日の終わりとして別れのあいさつがあることを理解している4歳児には一般的なあいさつを用いるのに対し、園生活始期の3歳児には、保育者と一緒に短い手遊びをすることで楽しい気持ちを共有したり、集団としての生活の区切りを意識したりできるようにしていた。

ポスター発表

41. わらべうたの音楽構造と 私たちの音楽認識の変容

松崎 真実 (こども教育宝仙大学専任講師)

わらべうたは長い間私たちの身近な存在であり、子ども達の遊びを豊かにしてきた。「かごめかごめ」「とおりゃんせ」など誰もが知っているが、その歌は遊びを介在していながらも、子どもらしさや楽しい印象を受けない。授業の中でも、わらべうたは日本の昔の歌で苦手とコメントする学生も多い。

保育園や幼稚園におけるわらべうた遊びの実施率は穂丸らのアンケート調査(2007)によれば90%だが、20歳代の保育者の実施率は有意に低い。実際に筆者が行ったわらべうた研究(2019)では、選曲した日本のわらべうた50曲について、学生が一人も知らなかったわらべうたは28曲にも達した。

しかし学生達にわらべうたへの意識が希薄なのは、学習経験の差だろうか。わらべうたの印象で暗い、怖いなどの意見が出るのは、環境の変容によって、私たちの音楽認識が変化したからではないだろうか。世界の音楽をすぐに視聴でき、日頃接するものがすぐに変化する現代において、私たちの民族的な音楽認識も無意識のうちに変容されたのではないか。その結果、わらべうたで遊んだ時代の音楽認識と今の私たちの音楽認識は異なってきたのではと推察される。

そこで本研究においては、わらべうたを構成する日本の音楽と西洋音楽の違いを比較する。日本の音楽の特性を明示したうえで、私たちが作り出す即興の歌がわらべうたなどの日本古来の歌と異なるのか、使われている音階の違いを調査することで、環境の変容が音楽認識の変容に結びついているのかを考察する。調査の対象として、保育士養成校の学生が自ら作詞作曲した歌の音階を楽譜に書きおこし、わらべうたの音階と現代の即興歌の音階に変化があるのかを調査した。

ポスター発表

42. 日本語指導のための「先行学習」 —日本人学校での実践の分析を通して—

渡邊 花穂（同志社女子大学大学院）

世界には、日本語指導が必要な児童生徒に日本語指導を行っている日本人学校がある。在フィリピン日本国大使館附属マニラ日本人学校もその一つで、生活言語には問題はないが、学習言語に対する日本語力が十分ではない児童が多く在籍する。彼らの「授業に参加するための日本語力」を伸ばすために、「先行学習」を主とした日本語指導を行っている。現在、日本語指導のための「先行学習」の指導内容について具体的に示された先行研究は多くない。そこで、本研究では「先行学習」を主とした実践の分析をもとに、日本語指導のための「先行学習」の指導内容とその指導のための工夫について明らかにする。

「先行学習」の主な指導内容は、①授業課題をつかむための重要な語彙の学習、②学習内容に関わる名詞の学習、③表現活動（「話し合う」「発表する」「書く」等）に必要な文型の学習、④表現活動に必要な接続詞の学習、⑤長文の内容整理、⑥文化的背景を伴う語彙や表現の学習の6点である。指導の工夫は、①視覚的支援、②モデル文の活用、③動作化を伴う体験的な学習及び具体物を活用した体験的な学習、④表現活動を助けるためのツールの使用の4点である。上記の内容に焦点の当てた指導を行うことで、児童は自信と安心をもって授業に参加することができる日本語力を身に付けることができる。

なお、授業分析であるため個人情報の特に取り扱うわけではないが、授業実践者や当該日本人学校他関係団体には分析・発表する許可を得ている。

ポスター発表

43. 絵本の研究 —絵本に描かれた主人公からその時代の 子ども観・教育観を読み解く試み—

戸次 佳子 (東京福祉大学)

親指と人差し指で作った両手の輪の中を通して引っ掛けた輪ゴムを、大事そうに持っている女の子。短い髪には青いピン留め、青い格子柄のワンピースに青い靴。その両足を開き、体を横に曲げ、「この輪ゴムをとらないで」というように、誰かを睨むような目つきで立っている。この表紙の絵本の題名は、「わたしのわごむはわたさない」(作・絵 ヨシタケシンスケ 2019年 PHP)である。

絵本は、幼児教育に欠かせない文化的環境の一つである。それらの絵本の多くが、子どものために創作され、主人公の多くは子どもである。しかし、その作り手は大人であり、そこには作者の思いや意図、時代による社会的背景が反映されている。従って、絵本に描かれた登場人物の言動を読み解くことは、その時代の大人がもつ子ども観や教育観を知る手がかりとして重要である。

本研究は、1969年発行の「わたしのワンピース」(作・絵 西牧茅子 1969年こぐま社)と、その後50年を経て2019年に発行された「わたしのわごむはわたさない」(前出)の2冊の絵本を取り上げ、そこに描かれた主人公の言動および物語の構成を比較検討することにより、描かれた時代における子育て観・教育観を読み解く試みである。

2冊の絵本を、主人公の言葉、動作、ストーリーの展開の観点から比較を行った結果、「わたし」と「物」との関係性、主人公の意思表示、空想世界の多次元的描写に関して両者の相違点が認められた。本研究の結果から、この2冊の絵本が出版された50年間に、大人のもつ少女像、大人が考える理想的な子ども像、物に対する関わり方など、子ども観や教育観に変化があることが示唆された。